

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：87101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2014

課題番号：22720304

研究課題名(和文) 東アジアにおける環鈴の基礎的研究

研究課題名(英文) A study of connected bells in East Asia

研究代表者

宮元 香織 (MIYAMOTO, Kaori)

北九州市立自然史・歴史博物館・その他部局等・その他

研究者番号：80435908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：環鈴の製作方法については個々の資料の詳細な観察から、土型を用いて製作しているものと、蠟型を用いて製作しているものに分かれる。特に朝鮮半島出土のものについては、蠟型を用いて製作した例が多く、反対に日本列島産とみられるものは土型を用いたものが中心である。そのようななか、土型で製作した日本列島産とみられる資料が韓国で一例出土しており、当時の対外交渉の痕跡を示していると考えられる。

日本列島産の環鈴はその製作技法などから、鈴杏葉や他の鈴付き馬具、鈴鏡の製作と強い関連性をもつとみられる。これらについては考察と合わせてデータベースを作成し、東アジアにおける環鈴の分布状況についてまとめた。

研究成果の概要(英文)：The connected bells (Kan-rei), unique at East Asia, are bronze wares. These were more than 100 in East Asia, but the majority was excavated in Japan. It's very important to research of Ancient casting technique, especially middle-Kofun period (AD400~500). The connected bells were made by two type techniques, earthen-type or wax-type. But, the wax-type technology evolved in Japan at later 7th century. The earthen-type was only technique at Japan in this age. In Japan, the excavated wax-type bells were making in Korea. Of course, in Korea, main technique is the wax-type.

Under such situations, the earthen-type found in Korea is thought to have been imported from Japan. This is the important case which studies international relations in these ages. The connected bell made in Japan has a same casting technique of other bells related bronze wares and the strong relation. I made a data base about these and study about the distribution situation of the connected bells.

研究分野：考古学

キーワード：古墳時代 三環鈴 青銅器生産

1. 研究開始当初の背景

環鈴とは古墳時代中・後期(西暦400年から530年ごろ)の約100年の間、日本を中心に分布する青銅製品である。その形状はひとつの環に3つもしくは4つの鈴をつけたもので、前者を三環鈴、後者を四環鈴という。

日本以外では朝鮮半島と中国大陸にわずかながら類例があり、東アジア全体では89例が確認されている。用途は馬につけた装飾品の一種であると考えられているが、出土状況から人間が装着したとみられるものもある。

研究の現状はけっして活発とは言いがたい。遺跡から発掘調査中に出土した場合、調査報告書に実測図と写真が掲載され、若干の集成がなされるのみで、製作技法に迫る検討はおこなわれていない。さらに蛍光X線分析などの自然科学的分析についてもほぼ皆無である。

応募者はこれまで、古墳時代に朝鮮半島を経由して新しく導入された埋葬施設である、横穴式石室について研究をすすめてきた。また、特に島嶼部に造られる古墳を対象として「中央」と「地方」の関係性を明らかにするなど、一貫して古墳時代中期から後期にいたるまでの社会構造とその変化の解明を目的として研究をおこなっている。

環鈴は、初期横穴式石室が築造されるのと同じ時期に集中して古墳に副葬されている。よって環鈴は横穴式石室と同様、朝鮮半島との密接なつながりの中で製作されたと考えられており、その研究手法や視点に共通する点が少なくない。かつ環鈴の分布域が当時の政治的中心地である畿内と東国、九州に偏在していることから、中央・地方関係を考える上でまたとない好資料といえる。

2. 研究の目的

古墳時代の青銅器研究は、弥生時代のそれに比べ若干遅れ気味の傾向があり、特に環鈴については有効な資料があるにもかかわらず、進展していないといつてよい。本研究は、東アジア出土の環鈴について、これまでにない考古学的・科学的情報を集積し、本格的なデータベースを作成することで、青銅器研究の進展をはかるものである。

またこの基礎研究によって、環鈴の製作過程を明らかにするだけでなく、それを副葬する古墳被葬者の性格、ひいては当時の社会構造について言及し、新たな古墳時代像を描くことが目的である。

3. 研究の方法

研究の方法は文献検索、資料調査、現地調査、整理・分析、成果報告の5つに大別される。年度ごとに達成目標を掲げ、研究計画をたてた。

初年度は簡易集成表の作成と文献検索・収集、西日本出土例の資料調査をおこなった。

次年度はデータベースの整備と東日本出

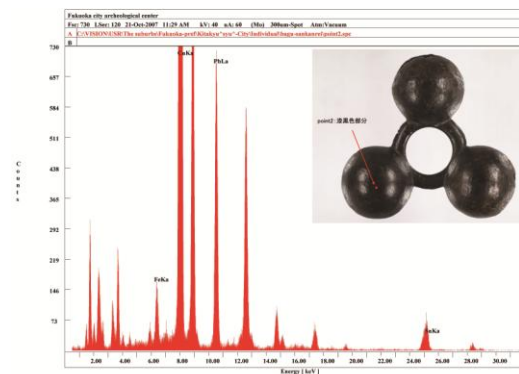
土事例の資料調査をおこなった。

最終年度は研究成果報告と未調査資料の検索をおこなった。

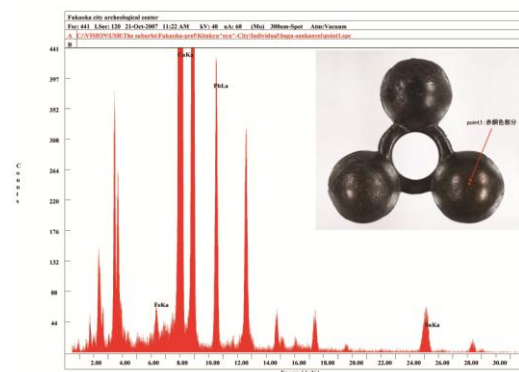
4. 研究成果

地域	墳名	現存
宮崎市下北方町	下北方地下式横穴墓5号	
熊本県和水町	江田船山古墳	
熊本県玉名市	伝玉名郡高瀬町付近	×
佐賀市久保泉町	関行丸古墳	
佐賀市久保泉町	花納丸古墳	
福岡県行橋市	稲童21号墳 A	
福岡県行橋市	稲童21号墳 B	
福岡県北九州市	岡田神社 蔵	
福岡県遠賀郡水巻町	八所神社境内古墳	
福岡県福津市	勝浦12号墳前方部石室	
福岡県飯塚市	伝漆生古墳群	×
福岡県飯塚市	森原1号墳	
福岡県甘木市	小田茶臼塚古墳	×
福岡県うきは市	月岡古墳	×
福岡県うきは市	塚堂古墳後円部石室	

表1 九州出土の環鈴



第4図 漆黒色部分分析値



第5図 赤銅色部分分析値

図1 環鈴の蛍光X線分析

環鈴の製作方法については個々の資料の



図2 韓国の四環鈴（蠟型）

詳細な観察から、土型を用いて製作しているものと、蠟型を用いて製作しているものに分かれることが分かった。特に朝鮮半島出土のものについては、蠟型を用いて製作した例が多く、反対に日本列島で製作されたとみられるものについては土型を用いたものが中心であった。



図3 韓国の環鈴（土型）



図4 図3の環鈴（横から）

そのようななかでも土型で製作された日本列島産とみられる資料が韓国で唯一出土しており、これらから当時の対外交渉の状況を読み取ることができる。出土地である全羅南道光州広域市は韓国の中でも特に古墳時代後期に前方後円墳が集中して造られた地域である。三環鈴はそれに先駆けた時期に出土するとみられることから、彼我の関係性に



図5 図3環鈴（内部の丸）

ついて一石を投じることができる。

日本列島産の環鈴はその製作技法などから、鈴杏葉や他の鈴付き馬具、鈴鏡の製作と



図4 日本国内の環鈴（土型）

強い関連性をもつとみられる。本研究では鈴付き馬具については検討対象外としたため、今後考察する必要がある。これらについては考察と合わせてデータベースを作成し、東アジアにおける環鈴の分布状況についてまとめた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

宮元香織、「北九州市岡田神社蔵 三環鈴について」、『北九州市立自然史・歴史博物館 研究報告 B 類歴史』、査読無し、第9号、2012、pp17-25

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮元香織 (MIYAMOTO, Kaori)
北九州市立自然史・歴史博物館・歴史課・
学芸員
研究者番号：80435908

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし